



## Chapter 2

# [サイン POP]

## 急速に進化するデジタルサイネージの今

中村伊知哉氏は、慶應義塾大学メディアデザイン研究科教授（博士）で、デジタルサイネージコンソーシアムの理事長でもある。今回、最新のデジタルサイネージ事情についてお話をお聞きした。

慶應義塾大学メディアデザイン研究科教授（博士）/デジタルサイネージコンソーシアム理事長  
中村 伊知哉氏



デジタルサイネージの関連団体であるデジタルサイネージコンソーシアムを作ったのが5年前。当時はまだデジタルサイネージとは何か、という説明をさせられることが多かった。

それが現在、随分変わった。まず、どこへ行ってもあるのが当たり前。当時は、あそこに来た、ここに来たというのがニュースになっていた。今は、ないのが不思議なくらいである。

それから当時は看板だった。屋外の大きなディスプレイで、そこだけでずっと同じコンテンツが流れているという状態だった。しかし、今は看板でイメージされる大型のディスプレイよりも非常に小さな3インチとか5インチぐらいのものがたくさん埋め込まれているようなものになってきている。

しかも、それらの多くがインターネットにつながっている。全部ネットワークメディアになってきている。だから、情報を送る人がいつでもどこにどういふものを流すかということ、自分でコントロールして送ることができるようになったのが大きな違いだ。

さらに、ここ1~2年の大きな変化としては、それまでは広告やエンターテインメントが主だった。それが急速に公的なパブリックなメディアになってきた。それは一つには震災の影響があった。震災で東京のデジタルサイネージは節電に協力するということでスイッチをオフにした。

業界では、なぜ我々はスイッチをオフにしなければならないのか、と話し合った。テレビはずっと点いているではないかと。テレビはそれまでエンターテインメント番組等をやっている時も震災の時は報道や災害情報を流して

いる。それでみなテレビを頼りにするから消さない。

デジタルサイネージは、今後も広告やエンターテインメントばかりだと消さなければならぬメディアになってしまう。それではいけないのではないかと。それでは広がらないのではないかと。どうすればもっと役にたつだろうかと、ということが議論された。そして震災情報を流すとか、電力の消費情報を流すということからだんだん明かりが点っていった。

同時に商業施設とか、街角で面白い情報をコマースにしているだけではなくて、人々の情報を共有するメディアとして役に立とうという動きが急に出てきて、今は学校、病院、市役所など公共的な空間に急速に広がっている。

これまでのような看板というよりも屋内外情報を共有するメディアに変化して広がっていく。これからは普通の職場や家庭の中でも、テレビやパソコン以外の緊急情報を共有するようなメディアとして広がっていくのではないかと、言われている。

同時にメディア自体が変化していて、スマートフォンやタブレット端末など、マルチスクリーンと言われるものがどんどん出てきたので境目がなくなってきている。これからはそういうものが全部融合していくのではないかと。街角にある大きなディスプレイもスマホも一体になっていくはず。

しかし、そうなるとその情報の見せ方やコマースがどうなっていくか、具体的なイメージができていない。これからどう変わっていくかが現在の関心事だ。